

## ツングース諸語の接辞 *-ča* について

風 間 伸 次 郎  
(東京外国語大学)

## The suffix *-ča* in Tungusic languages

KAZAMA, Shinjiro  
Tokyo University of Foreign Studies

The suffix *-ča* function as the ordinary past tense form in some Tungusic languages (such as Ewenki) while in other languages (such as the east dialect of Ewen) the cognate suffix exhibits noun-like behavior, and the verbal character of the suffix is more restricted. Moreover, in other Tungusic languages (such as Nanai), the cognate morpheme is a nominalizing suffix with limited productivity. In this paper, I propose to reconstruct the historical development of the past tense in Tungusic languages through an analysis of this suffix: further, I attempt to clarify the cross-linguistic problem of the development and decline of inflectional elements.

**Keywords:** Ewen, Udihe, Nanai, past tense, functional change, scope of a suffix

**キーワード:** エウエン語, ウデヘ語, ナーナイ語, 過去形, 機能変化, 接辞のスコープ

1. はじめに
2. 先行研究
3. 研究方法
4. 分析
5. まとめと今後の課題

### 1. はじめに

#### 1.1 通言語的な問題提起と本稿の目的

一般に語彙的緊密性 (lexical integrity) ということが言われている。すなわち、接辞の効力は語の内部に及び、複数の語に対してその効力は及ばない。

- (1) a. kyouto#ik-i 「京都行き」      b. \*kyouto=he | ik-i 「\*京都へ | 行き」

上記の例において、(1)a には問題がないのに対し、(1)b のような例は成り立たない。名詞化接辞である *-i* の効力が語を越えて機能しないためである。別の視点から言えば、「目的地を示す名詞項を支配し得る」という *ik-u* 「行く」の動詞的な性格は、名詞化によって失われてしまうということである。他方、接辞の中に

は語を越えて働くものもあり、その統語構造は語境界とミスマッチを起こす。

(2) [four | legg]-ed, [somebody | else]-'s<sup>1</sup> hat

一方、多くの言語において、より屈折的な接辞は往々にして複数の語や文全体にわたって働く。すなわち、「広いスコープを持っている」という点で特徴的である。次に見る日本語の例では、過去を示す接辞や、格を示す付属語が広いスコープを示している。このことは、1つにはテンスや格といった文法的な意味が広いスコープを要求するものである、ということに起因しているものと考えられる。

- (3) a. [家に | 帰って | ごはんを | 食べて | 寝] た。  
b. [大きくて | 白い | 花] を

しかし、このような文法的な意味の接辞であれば、どんな言語でも同じように広いスコープを示す、というわけでもないようだ。このことについて、亀井・河野・千野 (1996: 1022) に次のような記述のあることが注目される（下線・太字は筆者による）。

英語などの印欧語では、その動詞の使い方に「時の一致」とよばれる現象がある。たとえば、英語では、間接話法の複文の主節と従属節の動詞の時称を合わせる。

He *told* me that she *was* ill. (中略)

この現象は、印欧語の語の特徴の現れである。印欧語の語は独立性が強く、文はそのような語の並立関係の上になっている。したがって、従属節の動詞も、主節の動詞と同じ時称の指標をもたなければならなくなる。上の英文を日本語に訳すと、「彼は私に、彼女は病気だと言った」となり、日本語では時の一致は起こらない。日本語には間接話法は存在しないし、日本語の統語法では、従属節の動詞は常に主節に対して従属的な関係におかれるからである。

つまり、亀井・河野・千野 (1996: 1022) にしたがえば、日本語のような言語では、印欧語よりも接辞が広いスコープを持っているということになり、言語の性格によって接辞の力が及ぶ範囲は異なってくることが考えられる。(3)b. のような場合も、例えばロシア語であれば、形容詞が名詞に対して性・数・格の一致を示し、その修飾関係はその一致によって保証される。つまりここでも個々の語の独立性の高いことが観察される。

次にみる例 (4) は英語の分詞構文であるが、分詞 *asking* はその動作主 (*your*) と目的語 (*that question*) を表示することができる。

(4) I was certainly surprised by [*your ask-ing that question*].

すなわち、分詞のような準動詞 (*verbal*) を作る接辞は、屈折接辞ほどではないが、そのスコープが広く、これによって形成された語は、なお動詞的な性格を残しているケースが観察される。他方、たとえばチェコ語の準動詞の動詞的性格は

<sup>1</sup> このいわゆるゲルマン属格については、接辞でなく付属語とみる研究もある。

あまり強くなく、(4)と同じような意味は関係詞節によってしか表せないという(マテジウス (1986: 106-116))。したがってこのような準動詞の持つ動詞的性格は、印欧語族の歴史を通じて強くなったり弱くなったりという変化を繰り返してきたことも予想される。

以上のような通言語的な背景を踏まえ、本稿では、ツングース諸語のいくつかにみられる接辞で、それらがともに同じ語源に溯ると考えられる接尾辞 *-ča* について考察する。

接尾辞 *-ča* は、いくつかのツングース語(エウエンキー語など)では、過去の標示に特化したテンス標識として機能している。ところがその一方で別のツングース語(エウエン語東方言など)では、この接辞がついた動詞の機能はより名詞的で、その動詞的な力がより制限されている。さらに他のツングース語(ナーナイ語など)においては、*-ča* は生産性の弱い名詞化接辞であり、これがついた動詞は動詞的な性格のほとんどを失ってしまっている。しかし動詞語幹に直接つく接辞であるという点では、どの言語でも一致している。

本稿では、ツングース諸語にみられるこの *-ča* という接辞の分析を通して、ツングース諸語におけるテンス体系の変遷、屈折接辞の成立と衰退、などの問題について考える。

## 1.2 ツングース諸語の分類とテンス体系

### 1.2.1 ツングース諸語の分類

Ikegami (1974) はツングース諸語を以下のように分類している(各言語の略語、ならびに下線や太字は筆者による)。

I 群 エウエン語(Ew)、エウエンキー語(Ek)、ソロン語(S)、ネギダル語(N)

II 群 ウデヘ語(U)、オロチ語(Oc)

III 群 ナーナイ語(Na)、ウルチャ語(Ul)、ウイルタ語(Ut)

IV 群 満州語(Ma)、女真語(J)

I 群から IV 群までの4つのグループはいろいろな面で互いにかなり異なっているが、それぞれのグループ内の言語は互いにかなり近い関係にある。特に下線を付した I 群の3言語と III 群の3言語は互いに近い関係にある。本稿では主に太字で示した3つの言語を中心に考察する。

### 1.2.2 ツングース諸語のテンス体系

まずこの3つの言語にエウエンキー語を加えた4つの言語のテンスの体系を整理しておく。未来時制もあるが、本稿での議論には関わらないのでこれは示さない。不規則動詞に現れる異形態も省略した。なお大文字は母音調和による異形態があることを示す。したがって本稿で問題とする形式も、以下では *-čA* と表記する。なお Malchukov (1995) は下記の表の「直説法現在」にあたる形を、現在 (present) ではなく、非未来 (nonfuture) と呼んでいる。エウエン語については、文献によってその記述が異なるため、2つの文献の記述を示すことにした。

表1 ツングース諸語のテンス形式（太字は頻度の高い形式）

	エウエンキー語	エウエン語		ウデヘ語	ナーナイ語
《典拠》	Bulatova (1999)	Malchukov (1995)	Novikova (1968)	筆者調査	筆者調査
直説法現在	<b>(-jA)-rA</b>	<b>-rA~~sA~~dA~~A</b>	<b>-rA~~sA~~dA~~A</b>	-ø	-A~~rA~~dA
直説法過去	<b>-čAA</b>	<b>-rI~~sI~~dI~~I</b>	——	-'A~~A~~gA	-kA
形動詞現在	<b>(-jA)-ri</b>	<b>-rI~~sI~~dI~~I</b>	<b>-rI~~sI~~dI~~I</b>	<b>-i</b>	<b>-i~~rii~~dii</b>
形動詞過去	-čA	-čA	-čA	<b>-a(n)~~ki(N)</b>	<b>-xA(n)~~ki(n)</b>

まず直説法現在と形動詞現在に関しては、I・II・III 群の言語間でそれらの形式がよく対応する。表に見るように独特の異形態の現れ方が共通していることがその証拠となる。形動詞現在形は、直説法現在の形に *\*-i* がつくことにより、*-rii* < *-ra-i* のようにして形成されてきたものと考えられる。異形態の現れ方がよく似ているのはこのためである。直接法現在では、これに続く人称の諸形式の現れ方も独特で、それも音対応の規則が適応された上でよく一致する。ウデヘ語だけは一見大きく違っているように見えるが、これは *-ra* の部分が語幹の方に吸収されたためである。ウデヘ語ではさらに *r* の全般的な脱落が起きたため、その痕跡はわかりにくくなっているが、他の言語で *-dA* の異形態が現れる動詞では、はっきりとそれがわかる。「取る」という動詞は、エウエン語やナーナイ語では *ga-* という語幹であり、*ga-da-*, *ga-dii* などの形で現れるが、ウデヘ語での語幹は *gada-* で、*gada-ø*, *gada-i* などの形で現れる。

他方、対応しないのは過去の形で、I 群と II・III 群の間で対応しない形が現れる。ウデヘ語の過去形とナーナイ語の過去形は一見異なっているが、これは音対応から説明できる。まずウデヘ語で狭母音の後の母音間の *k* は *g* になったが、広い母音の後の母音間の *k* は母音の緊喉母音（上の表の *-'A*）化を経て消失した。したがってウデヘ語の直説法過去の形 *-'A~~A~~gA* はナーナイ語の *-kA* とよく対応する。形動詞過去においても、子音終わりにつく独特の異形態 *-ki(n)* の存在が、やはり同語源であることを明確に示している。他方、I 群の形動詞過去はおしなべて *-čA* という形になっている。エウエンキー語では、さらに直説法過去も *-čAA* になっている。

次に、機能や頻度の点から、これらの形式を言語間で比較してみる。まず形動詞は3つの機能（名詞的（準体的）用法・連体的用法・述語的用法）を持つ実詞的機能の形式であるのに対し、直説法の形の動詞は文末述語にしか用いられない、という点は全言語に共通している。しかしそれ以外の点では、各群の間にいろいろな違いがある。

まず直説法現在は、形の上ではよく対応するが、頻度の面では大きな違いがある。I 群の言語ではこの形がもっとも default な形であり、高い頻度で用いられるのに対し、II・III 群の言語ではそうではない。まず3人称ではほとんど全く用いられない。1, 2人称での使用も会話文で、自分が実際に体験した事柄の場合にもっぱら用いられる（この点に関しては風間 (2005a), 風間 (2007)も参照されたい）。II・III 群で現在の事を語る場合には、形動詞現在の述語用法のものが圧倒的な頻度で用いられる。過去形にも同様の事情があり、II・III 群で過去のことを語る場合にはもっぱら形動詞が用いられる。直説法過去の形の使用は、やはりもっぱら1, 2人称で、自分が実際に体験したことがらの場合に限られる。

さらに、I 群の言語の直説法現在の形は、現在のことに用いられるばかりでなく、過去のできごとにも用いられる。Malchukov (1995: 15)がこれを、非未来

(nonfuture) と呼んでいることはすでに触れた。さらに次のように述べている：the nonfuture in *-ra/-re-*, which derived from telic verbs, refers to past (cf., e.g., *emu-re-m* ‘I have (just) brought’), derived from atelic to the present (cf., e.g., *ilat-ta-n* ‘(he) stands’). Novikova (1968: 96-98)は直説法に現在 (*nastojashshee vremja*) と未来をあげているのみで、過去がない。しかし別の箇所では直接法現在について、現在（一般）時制 (*nastojashshee vremja* (*obshshee vremja*)) とも書いている (Novikova 1968: 96)。エウエンキー語においても状況は同様で、Bulatova (1999: 34) には次のような記述がある：the most controversial of the tenses is the one formed with the suffix *-rV-*. It has alternately been analyzed as a simple past, an aorist or a present tense suffix. This controversy has arisen from the fact that its temporal interpretation varies, depending upon its combination with different aspect morphemes.

### 1.2.3 ツングース諸語のテンス体系の歴史的変遷に関する仮説

基本的に無文字言語であって、歴史的な資料もないため、以下に述べることは推測に過ぎないが、歴史的変遷の過程には、次の2種類の可能性が考えられる。

①ツングース祖語の段階では、過去と現在に関するテンスの対立はなく、evidentiality に関する対立のみがあり、*-ra* は直接体験であれば現在のことに過去のことにも用いられた。その後、II・III 群の言語では現在の直説法過去形にあたる形と形動詞過去形にあたる形が新たに生じたか、外部からもたらされた（もしくは元からあったものの機能が変化した可能性も考えられる）。外部からの場合、例えばモンゴル語の過去形動詞 *-Gsan* などがその来源の候補として考えられる。その影響は満洲語を通じてのものであったかもしれないし、満洲語自体からの影響であった可能性もある。他方、I 群の言語ではその後、エウエンキー語においては過去形動詞の *-čA* が、エウエン語においては現在形動詞の *-rI* が、過去の機能をも果たすようになり、高い頻度で用いられるようになった。

②ツングース祖語の段階にも、現在と過去の対立はあったが、I 群の言語では何らかの理由で II・III 群にみられる直説法過去と形動詞過去の形が失われた。もしくはやはり現在と過去の対立は存在せず、何か別の機能を果たしていた *-kA*, *-xA(n)~ki(n)* という2つの形が失われた。その代償に、エウエンキー語においては過去形動詞の *-čA* が、エウエン語においては現在形動詞の *-rI* が、過去の機能をも果たすようになった。

どちらの仮説にも問題点はある。音対応から見ると、III 群が分岐した後に、I 群と II 群が分岐したものと考えられる (Kazama (2003) 等を参照されたい)。とすると、I 群と II 群が分岐した後に、II 群と III 群の言語の両方に、しかも別個に *-kA*, *-xA(n)~ki(n)* という2つの形が生じた、もしくはもたらされたとは考えづらい。 *-xA(n)~ki(n)* の異形態の現れも独特であり（前者は母音語幹に、後者は子音語幹につく）、したがってこれらはやはり元々ツングース祖語の段階から存在していたものと考えたい。しかし I 群の言語にはその痕跡が見当たらない。もしかすると、エウエンキー語で Konstantinova (1968: 80) が推量法過去としている *-rkA*、エウエン語で Novikova (1980: 80) が可能法としている *-ku* が *-kA* に対応するものであるかもしれない（しかし母音が *i* に交替したような異形態があるわけではない）。

他方、I 群の形動詞過去である *-čA* については、その対応形式と思われるものを II・III 群の言語に見出すことができる。それはナーナイ語では *-čA* であり、ウデヘ語では *-sA* である（ウデヘ語では破擦音の摩擦音化（ $\text{č} > s$ ）が起きた（cf. (Oc) *čuča-* || (U) *susa-* 「逃げる」））。

したがって、これらの形式の機能の分析ならびに比較は、ツングース諸語にお

けるテンス体系の変遷の一端を明らかにしてくれるものと考えられる。次節では、*-čA* についての先行研究の記述を検討する。

## 2. 先行研究

### 2.1 エウエン語および I 群の言語における *-čA*

Malchukov (1995) は形動詞 (participles) の節でエウエン語 (東方言) の *-čA* をとりあげ、*-čA* による形動詞の名詞修飾用法、名詞的用法、述語的用法の例をあげている (訳も Malchukov (1995: 17) による)。

- (5) *əm-čə*                      *bəj-ə*                      *gəən-ni*.  
come-PERF.PTCP    man-NOM                      say-NONFUT.3SG  
'The man who had come said.'
- (6) *ətikən*    *əm-čə-wə-n*                      *haa-ra-m*.  
old man    come-PERF.PTCP-ACC-3SG    know-NONFUT-1SG  
'(I) know that the old man has come.'
- (7) *bii-ə*    *əm-čə*                      *bi-sə-m*.  
I-NOM    come-PERF.PTCP    be-NONFUT-1SG  
'I have (already) come.'

Malchukov (1995)によれば、(7)のような述語的用法において、主語が3人称非未来の場合には、コピュラ *bi-* は省略される。そしてコピュラなしで過去形として機能する。このような構造は、中央・西方言においてきわめて広汎に用いられているという。

つまりエウエンキー語で観察されたような *-čA* の過去形への発達は、エウエン語の一部の方言でも独立に生じてきていることがわかる。筆者はこのような変化の流れを、I 群の諸言語における一種のドリフトであると考ええる。

ここではさらに、I 群の諸言語における *-čA* について詳しくみておく。

表2 I 群の諸言語の *-čA* の人称変化

	エウエン語	エウエンキー語	ネギダル語	ソロン語
1 人称単数	<i>-čA-w</i>	<i>-čAA-w (-čAA-m)</i>	<i>-čA-w</i>	<i>-s-U</i>
2 人称単数	<i>-čA-s</i>	<i>-čAA-s</i>	<i>-čA-s</i>	<i>-sAA-sI</i>
3 人称単数	<i>-čA-n</i>	<i>-čAA-n</i>	<i>-čA-n</i>	<i>-sAA</i>
1 人称複数除外	<i>-čA-wUn</i>	<i>-čAA-wun</i>	<i>-čA-wUn</i>	<i>-sAA-mUn</i>
1 人称複数包括	<i>[-čA-t ?]</i>	<i>-čAA-t</i>	<i>-čA-t</i>	<i>[-sAA-tI ?]</i>
2 人称複数	<i>-čA-sUn</i>	<i>-čAA-sun</i> ( <i>-čAA-wus</i> )	<i>-čA-sUn</i>	<i>-sAA-sUn</i>
3 人称複数	<i>-čA-tIn~-čA-l</i>	<i>-čAA-tin</i>	<i>-čA-tIn~-čA-l</i>	<i>-sAA</i>

エウエンキー語の諸形は Konstantinova (1968)によった。他の言語の諸形は筆者調査による。[ ? ]の部分は実例を確認できていない。ソロン語でも破擦音の摩擦音化が起こったため、問題の形は *-sAA* となっている (厳密にいうと、母音終わりの名詞につく時は *-sAA* で、子音終わりの名詞につく時は *-čAA* である)。

I 群の人称接辞には、もっぱら直説法の動詞のみにつくセットと、形動詞や名詞などの名詞類につくセットの2種類がある。表中の人称接辞はまさしく名詞につくほうのそれになっている。ただし3人称の接辞に関しては、言語間で、もしくは同じ言語の中でも若干の揺れがあることがわかる。エウエンキー語とソロン語の母音が長い点も気になるが、エウエンキー語、ネギダル語、ソロン語で述語に用いられるものも、やはりエウエン語の形動詞の *-čA* と同起源であることは間違いないものと筆者は考える。エウエンキー、ネギダル、ソロンの3言語は系統的にかなり近い関係にあり、この3言語では、どの言語においても *-čA* は単なる過去形として記述されている。したがって、これらの祖語の段階においてすでに形動詞 *-čA* は過去形としての地位を得たものと考ええる。

## 2.2 ウデヘ語における *-sA*

Nikolaeva and Tolskaja (2001) に、*-sA* についての記述は2ヶ所ある。

Nikolaeva and Tolskaja (2001: 146)では、*-sA* を受動形動詞 (passive participle) の一つである過去受動形動詞とし、現在ならびに未来の受動分詞と対立してパラダイムをなすものと位置づけている。

表3 ウデヘ語の受動分詞

	<i>wakca-</i> 「狩りする」
現在受動形動詞	<i>wakca-u-j(i)</i>
過去受動形動詞	<i>wakca-sa</i>
未来受動形動詞	<i>wakca-u-jəŋə</i>

以下、Nikolaeva, I. and M. Tolskaja (2001: 146) の記述を要約する(筆者訳による)。

受動形動詞は全ての動詞から派生でき、自動詞・他動詞の別を問わない。非人称の形のみを持ち、人称では変化しない。格は普通の名詞と同じ接辞をとる。現在と未来の接辞は受動とテンスの2つの接辞からなるが、過去受動形動詞の接辞は一つの複合した接辞である。

以下は、Nikolaeva, I. and M. Tolskaja (2001: 363-366) の記述を要約する。

非人称受動は自動詞節でも他動詞節でも頻繁に生ずる。非人称受動の主たる機能は、動作主の除去もしくは降格であるが、直接目的語は元の構造のまま残り、主格には昇格しない。ただし直接目的語の形態的な対格表示は落ちることがある。

- (8) *uləə* / *uləə-wə*                      *zii-sə.*  
 meat / meat-ACC                      cut-sA  
 「その肉は切られている」

動作主はめったに現れることはなく、与格で現れる文がごくまれにあるが、それは直接受動文からの影響によって生じたものである。

非人称受動は受動形動詞とコピュラからなる。コピュラは3人称単数の形をとるが、現在時制では通常省略される。構造全体の時制はコピュラのとる時制によって決まる。コピュラも過去になれば、過去完了のような意味を実現する。

- (9) *oŋo-wo*                      *oŋo-so* (*bii-ni*).  
 letter-ACC                      write-sA COP-3SG  
 「手紙を書いた」

- (10) *əi*            *oŋo-wo*            *anana*    *oŋo-so*    *bi-s'ə*.  
          this       letter-ACC       once       write-sA   COP-PERF  
          「この手紙は昔に書いたのだった」

### 2.3 ナーナイ語における -čA

ナーナイ語の -čA に関する記述は少なく、Avrorin (1959: 119) には、名詞形成接辞の 1 つとして、約 1/3 ページほどの記述があるのみである。例文も提示されていない。以下にその内容を示す（筆者訳による）。

接辞 -čA は、それが現れる語ではその明確な意義を保持しているが、新たな語形成は行わない。非生産的だが、まだ生命力を失っていないものとみることができる。この接辞は、閉める、覆う、繋ぐ、作る、などの意の動詞語幹から、対象物もしくは行為の結果を意味する名詞を形成する。例: *xobola-čA* 「壁紙」 < *xobola-* 「壁に貼る」, *daka-čA* 「テーブルクロス」 < *daka-* 「覆う」, *dasi-čA* 「カーテン」 < *dasi-* 「さえぎる」, *kapsa-čA* 「包帯」 < *kapsa-* 「巻く」, *jakči-čA* 「錠」 < *jakči-* 「鍵を閉める」, *gui-čə* 「屋根」 < *gui-* 「屋根で覆う」, *ui-čə* 「結び目」 < *ui-* 「縛る」, *noŋgi-čA* 「追加」 < *noŋgi-* 「追加する」, *pisa-čA* 「つぎ」 < *pisa-* 「つぎを当てる」, *tolbo-čA* 「鋏」 < *tolbo-* 「鋏で留める」, *si-čə* 「コルク」 < *si-* 「栓をする」, *solli-čA* 「混合物」 < *solli-* 「混ぜる」, *səkpən-čə* 「くつわ」 < *səkpən-* 「噛む」, *namo-čA* 「しわ、折り目」 < *namo-* 「折る」, *ango-čA* 「建設」 < *ango-* 「作る」, *bəli-čə* 「糧食」 < *bəli-* 「準備する」

## 3. 研究方法

エウエン語に関しては、風間 (2002a) から用例を収集した。

ウデヘ語に関しては、風間 (2004) および風間 (2006) から用例を収集した。

ナーナイ語に関しては、風間 (2001) および (2002b)、(2005b) から用例を収集した。

収集した用例に関して、その出現頻度と、どんな動詞についているか（特に自動詞であるか他動詞であるか）、名詞的／動詞的な性格、全体の用法、などについて分析した。

出現頻度に関しては、筆者作成のテキストにおける 1 ページあたりの出現頻度という形で示した。筆者作成のテキストが基本的に同じフォーマットでできているためである。1 ページは 13 行の訳つきのテキストからなり、1 行あたりの語数は平均的にみて 6 語程度である。

## 4. 分析

### 4.1 エウエン語

風間 (2002a) (全 86p.) から 49 例の用例が得られた。したがって、出現頻度は約 1.76 ページに 1 つという割合であった。

この接辞をとっていた動詞の一覧を以下に示す: 5 例 *bi-* 「ある、いる、～である」、4 例 *jəp-* 「食べる」、*gəən-* 「言う」、3 例 *oo-* 「なる」、*tia-* 「奪う」、*uŋu-* 「ああする (Filler verb)」, 2 例 *bəl-* 「助ける」、*bəə-* 「与える」、*təəə-* 「話をする」、以下は 1 例ずつ *alla-* 「予告する」、*balda-* 「生まれる」、*ə-* [否定動詞]、*əmu-* 「持つ」



て来る」, *ga-*「取る」, *gırka-*「歩く」, *ılı-*「立つ」, *jəm-*「お腹がすく、飢える」, *kotm-*「固くなる」, *kəkə-*「死ぬ」, *maa-*「殺す」, *naabɔ-*「嘆く」, *niŋi-*「呪いをかける」, *ñəkɯ-*「する」, *ñəə-*「出る」, *ŋəələ-*「恐れる」, *ŋənu-*「持っていく」, *əsəə-*「できない」, *təətə-*「跳びはねる」, *ulu-*「掘る」, *xukulu-*「転げ落ちる」

自動詞も他動詞もあり、特に何らかの意味分野に偏っているということもない。一般的に頻度の高い動詞が上位を占めていることから、この接辞が偏りなくいろいろな動詞につくことがわかる。

次に用法をみると、名詞的用法の例が 26 例、述語的用法の例が 23 例で、名詞修飾用法（形容詞的用法）の例はなかった。なお先行研究の 2.1 でみたように、3 人称非未来では省略されるが、そうでなければコピュラ *bi-* が現れるようだ。エウエン語（およびツングース諸語一般）において、コピュラの前の位置は名詞の現れる位置であり、さらに名詞述語文であっても、3 人称非未来であればコピュラは現れない。つまり単に名詞を並列すれば名詞述語文となる。したがって述語用法とみてきた *V-čA* も、名詞の現れる位置に現れているのだから、広い意味では全て名詞的用法であるということになる。

以下では具体例を示して、さらに検討を加えておく。

まず、これは *jəp-*「食べる」という動詞においてもっばら見られることなのかもしれないが、この動詞に *-čA* がつくと、「食べ物」という意味になり、全くモノ名詞化してしまう。

- (11) *tadok=ta ilan inəŋ-u aac jəp-čə-lə-j,*  
 then=CLT three day-ACC without eat-čA-AGR-REF.SG.POSS  
 「それから 3 日間無しで、自分の食べ物が、」

名詞的用法の *-čA* の用例の中には、（再帰を含む）所属人称、格、譲渡可能の接辞がついた例や、前に人称代名詞の属格が共起している例が見出される。このことはやはりエウエン語の *-čA* がすぐれて名詞的な性質を持っていることを物語っている。(12) は再帰所属人称がついた例である。(13) の例では、道具格をとった名詞的用法の例と、コピュラをしがえた述語的用法の例が 1 文中に現れている。

- (12) *xaara-tki jəplu-ŋ-ŋə-n ŋənu-čə-j*  
 company-DIR food-ALIEN-ACC-3SG.POSS bring-čA-REF.SG.POSS

*ŋənu-φ-n.*  
 bring-PRS.IND-3SG

「仲間へその食べ物を、自分の持って来たのを、持って来た」

- (13) *tiitəl bii tarroočm bəl-čə-ji,*  
 long.ago I in.that.way help-čA-INS

*əɾək əŋəjə oo-čə bi-su-m.*  
 this rich become-čA COP-PRS.PTCP-1SG

「ずっと前に私はそんな風に（人を）助けたことでこんな金持ちになったのだ」

先行研究の記述に従えば、述語的用法の場合、主語の人称はもっばらコピュラ

に表示され、-čA がついた動詞のほうには人称要素が現れないという。しかし、実際の例をみると、主語が3人称非未来でコピュラが現れない場合には、2.1でもみたように、人称要素が現れる場合 ((14)a, (15)a) と現れない場合 ((14)b, (15)b) の両方があることがわかる。この原因についての究明は今後の課題である。

(14) a. *xəwki*      *bəθ-čə-n.*

god      give-čA-3SG  
「神が下さった」

b. *čakti-jɪ*      *əŋəjə*      *oo-čə.*  
alert-INS      rich      become-čA  
「機敏さで金持ちになった」

(15) a. *tar*      *biji-l-čə-tən=tukən,*      *mədna-θ-n.*  
in.that.way      live-INC-čA-3PL=CLT      finish-PRS.IND-3SG  
「そうして彼らは暮らし始めた、終わり」

b. *atkaa-r=da*      *čəŋut-mi*      *əsəəl-čə-l.*  
old.woman-PL      fish-CONV      cannot-čA-PL  
「おばあさんたちも釣りもできなかった」

なお、コピュラのほうもさらに -čA をとって、過去完了のような意味を実現している例もあった。

(16) *bəj-duk*      *balda-čə*      *bi-čə-n*      *tiək.*  
person-ABL      be.born-čA      COP-čA-3SG      now  
「人間から生まれたのだった、今」

ちなみに、-čA が default の過去形として使われる（エウエン語以外の）I 群の言語についても、-čA の出現頻度について、若干の調査を行ってみた。ネギダル語とソロン語については、筆者が自身で調査したテキストを持っているので（それぞれ風間 (2002c) と風間・トヤー (2008)）、これに基づいて出現頻度を調べた。それぞれのテキストの最初の 10 ページ（風間 (2002c: 15-25) と風間・トヤー (2008: 16-25)）に現れる -čA （ソロン語では -sA）について調べたところ、ネギダル語では 47 例、ソロン語では 59 例であった。したがって 1 ページあたりの出現頻度はそれぞれ 4.7, 5.9 となり、エウエン語の 1.76 を大きく上回っていることがわかる。

## 4.2 ウデヘ語

風間 (2004) (全 537p.) からは 23 例、風間 (2006) (全 96p.) からは 15 例の用例が得られた。したがって、出現頻度は約 14.1 ページに 1 つ、という割合であった。

この接辞をとっていた動詞の一覧は次のようである：5 例 *xəkə*-「縛る」、3 例 *jawa*-「つかむ、飼う」、2 例 *butu*-「塗る」、*gai*-「連れて来る」、*maŋju*-「撒く」、*olokto*-「煮る」、*woo*-「作る」、*amia*-「残す」、*guamanau*-「骨が多い」、以下は 1 例ずつ *alau*-「犬を繋ぐ」、*baa*-「見つける」、*bagdi*-「暮らす」、*bə'i*-「縛る」、*bokpi*-「餌を仕掛ける」、*əda*-「なる」、*gigdə*-「広げる」、*ilaa*-「火を焚く」、*jəusi*-「何やかやする」、

*jəə*-「準備する」, *maŋɡaa*-「恐ろしくなる」, *niəntilə*-「開ける」, *sii*-「皮を剥ぐ」, *ula*-「水に浸ける」, *usi*-「巻く」, *xuaŋgi*-「削り取る」

*guamanau*-「骨が多い」と *bagdi*-「暮らす」、*maŋɡaa*-「恐ろしくなる」、*ədə*-「なる」の4語以外は全部他動詞であり、しかもいずれもその動作・行為の対象物が結果として残るような動詞ばかりである。先行研究では、ホストの動詞は自他を問わず、頻度も高いとしていたが、それは正しくない。つまり、出現頻度はナーナイ語同様、あまり高くはなく、これがつく動詞はもっぱら他動詞であり、しかも意味に偏りがある。

また先行研究では、*-sA* を現在受動分詞 *-u-j(i)* や未来受動分詞 *-u-jəŋə* とともに1つのパラダイムの中に位置づけていたが、これも正しくないと考える。機能も大きく異なる上、上記のようにホストの動詞に大きな偏りがあるためである。

次に用法をみると、述語的用法が26例、名詞的用法が12例、名詞修飾用法（形容詞的用法）が2例であった。先行研究の例は述語的用法のものばかりであったが、それではこの接辞の全容を捉えているとは言えない。

- (17) *səxi-ji*                      *woo-so*    *maiga*.  
material-INS                  make-sA tent  
「布で作られたテントだ」                      [名詞修飾用法（形容詞的用法）]

- (18) *gəgbəŋku*                  *tai-i*,                      *səutigə*                  *tai-i*  
berry                          gather-PRS.PTCP          pine.cone                  gather-PRS.PTCP  
  
*utə*                                  *bagdi-sa*,  
in.that.way                  暮らす-sA  
「ベリーを集める、松ぼっくりを集める、そうして暮らした」  
[述語的用法]

名詞的用法のものには、対格接辞をとったものが4例、処格接辞をとったものが1例、人称接辞をとったものが5例あった。対格、3人称の人称接辞、再帰人称接辞をとっている例をそれぞれ示しておく。

- (19) *diga-i*,                      *maa*    *awa*,    *jaŋja*    *olokto-so-wo*.  
eat-PRS.PTCP                  look    this.ACC trout    煮る-sA-ACC  
「食べなさい、ほうらそれを、コクチマスを煮たのを」
- (20) *uti*                  *juu*                  *aanta*    *gai-sa-ni=da*                      *anči*.  
that                  two                  woman    take-sA-3SG.POSS=CLT                  there.are.not  
「あの二人の女を連れて来たの（女）もいない」
- (21) *bəjə-wə-ni*                  *xəkə-sə-ji*,                      *siata*                  *kia-tigi*  
he-ACC-3SG.POSS                  bind-sA-REF.SG.POSS                  hard                  side-DIR  
  
*gaagi-i-ti*                      *bi-sə*.  
pull.up-PRS.PTCP                  COP-IND.PST  
「彼を縛っておいたのを、強くそばへ引き上げるのだった」

動詞的用法の例の中には、副詞によって修飾されている例が5例、道具格の名

詞を支配している例が 1 例、対格の名詞を支配している例が 7 例、格なしの名詞を支配している例が 9 例あった。

まずこの例(22) では道具格の名詞、再帰接辞をとった目的語の名詞、副詞が現れている。

- (22) *əi-ji*      *ʃuba*      *ŋaala-ji*      *ə=bəda*  
 this-INS   two      hand-REF.SG.POSS   this=CLT
- tiak*      *tiak*      *ʃwa-sa*      *gunə.*  
 tight   tight      hold-sA      said
- 「この二つの手をこのようにガッチリと組んでいるという」

対格名詞を支配している例は次のとおり。

- (23) *ʃauŋa-wa*      *ula-sa*      *bi-ə*      *gunə*  
 trout-ACC      soak-sA      COP-IND.PRS      said
- 「コクチマスが何匹も水に浸けてあったという」

問題は、次の 2 つの例にみるように、格なしの名詞を支配している例である。これは主語として機能しているのか、先行研究のいうように、対格なしの目的語として機能しているのか、明らかでない。

- (24) *ʃampa*      *gigdə-sə.*  
 mosquito.net      spread-sA
- 「蚊帳を広げてあった／蚊帳が広げてあった」
- (25) *uti,*      *aana*      *xuŋgi-sa,*      *amigda-ʃi,*  
 that      dugout      hollow-sA      poplar-INS
- 「その、舟は丸匏で削り取って作った、ポプラの木で  
 ／その、舟を丸匏で削り取って作った、ポプラの木で」

以上にみたように、ウデヘ語の *-sA* によって形成された語は、目的語をとるなど、動詞的な性格を強く持っていることがわかる。

### 4.3 ナーナイ語

風間 (2001) (全 330p.) からは 11 例、風間 (2002b) (全 111p.) からは 8 例の用例、風間 (2005b) (全 143p.) からは 15 例の用例が得られた。したがって、出現頻度は約 17.2 ページに 1 つという割合であった。

この接辞をとっていた動詞の一覧は次のようである：8 例 *xuku-*「包む」、5 例 *xumu-*「埋める」、*ulpi-*「縫う」、4 例 *ui-*「縛る、繫ぐ」、3 例 *aŋgo-*「作る」、*ñulə-*「塗る」、2 例 *pačī-*「髪を束ねる」、以下は 1 例ずつ *balji-*「生まれる、暮らす」、*kapsa-*「包帯を巻く」、*xərkə-*「巻きつける」、*xumsə-*「ひっくり返す」

やはり *balji-*「生まれる、暮らす」以外は全て他動詞であり、しかもいずれもその動作・行為の対象物が結果として残るような動詞ばかりである。自動詞 *balji-*「生まれる、暮らす」による例をあげておく。この例でも、*-čA* によって形成された語は、「生まれた」結果の対象物である「顔」を示している。

- (26) *xooni=daa*                      *ičə-i-ni=dəə*                      *təi*                      *ñoam-ba-ni*  
 how=CLT                      see-PRS.PTCP-3SG=CLT                      that                      she-ACC-3SG
- ərdələ-xən*                      *pujin=məə*                      *bi-i*                      *balji-ča-sal-či.*  
 bewitch-PST.PTCP    heroine=CLT                      COP-PRS.PTCP be.born-čA-PL-3PL.POSS  
 「どう見ても彼女に不思議な行いをしたプジン（女主人公）のような顔  
 の者たちだ」

ウデヘ語では全 40 例において異なり語数が 25 例であったのに対して、ナーナイ語では全 34 例において異なり語数は 11 例にすぎない。したがって、出現頻度はたいして変わりが無いが、ナーナイ語の *-čA* のほうが生産性は低く、より決まった語幹とともにしか現れていないことがわかる。しかし、Avrorin (1959: 119) があげていた例と重なっていたのは、*ui-*「縛る、繋ぐ」、*aŋgo-*「作る」、*kapsa-*「包帯を巻く」の 3 語のみである。したがって、Avrorin (1959) のいうように、もはや生産性を失った接辞とみなすには問題があるだろう。今回得られた語の他にも、対象物が結果として残るような動詞であれば、まだまだ派生可能なものはたくさんあると思われる。

次に用法をみると、名詞的用法の例が 31 例で、形容詞的用法の例は 3 例のみ、述語的用法の例はなかった。まず形容詞的用法の例をあげる。

- (27) *gəə*                      *xamačaa=daada*                      *abaa*                      *joog-do-a-ni.*  
 well                      what.kind.of=CLT                      nothing                      house-DAT-E-3SG
- əsi=tənii təi*                      *ulpi-čə*                      *xukuə-kəəm-bə-ni,*                      *ao-rii*  
 now=CLT that                      sew-čA                      pouch-DIM-ACC-3SG.POSS                      lie-prs.PTCP
- tətuə-kəəm-bə-ni*                      *japa-raa*                      *nai*  
 cloth-DIM-ACC-3SG.POSS                      take-CONV                      person
- əəwu-gu-i=goani.*  
 go.down-ASP-PRS.PTCP=CLT  
 「さあ、何にも無い、家に。今その縫った縫い物袋と、寝る寝巻きだけ  
 をつかんで人は岸の方へ持って下りるのだ」

これも、修飾していると考えられる名詞 *xukuəkəəmbəni* に 3 人称単数の所有人称接辞 *-ni* がついているので、「縫い物の 縫い物袋」のように所有構造になっているとも考えられる。もう一つ見出された例も同じく *ulpičə xukuəkəəni* の例であったので、もしそうなら形容詞用法の例はなく、全て名詞用法であるということになる。ただこの例(27) では、並列して並べられている *aorii tətuəkəəmbəni* が、形動詞現在による修飾構造になっているので、*ulpičə xukuəkəəmbəni* もやはり形容詞用法であると考えたい。

- (28) *abaxa-ji*                      *xuku-čə-ku*                      *oktoŋ-go-ji*  
 leaf-INS                      wrap-čA-PROP                      medicine-DESIG-REF.SG.POSS

*əwɯ-gu-xə-ni,*

bring.down-ASP-PST.PTCP-3SG

「葉っぱでの包みのついた葉を持って下りて来た、」

他方、この例(28)にみられるように *-kO* 「～持ちの、～つきの」(恒常的所有の形容詞形成接辞)の接辞がついた例が 13 例もあり、この場合では、ほぼ「葉っぱで包んだ葉」のような意味を実現している。ただ *-kO* は形容詞を形成し、その形容詞は道具格の名詞を支配することができるので、このような構文が成立しているのは、もっぱら *-kO* の機能によるところが大きいといえる。次の 2 つの例では、*-kO* のついた句が述語的な用法を実現している。なお *-kO* 「～持ちの、～つきの」の機能に関しては、風間 (1999) も参照されたい。

- (29) *xudən*                      *daralaa-ji-a-ni*                      *kapsa-čə-ko*                      *bi-či-ni.*  
cutting.board                      width-INS-E-3SG.POSS                      tie.up-čA-PROP COP-PST.PTCP-3SG  
「裁断用の板ほどの幅で包帯を巻いていた」

- (30) *xai-do*                      *ilaan*                      *silia*                      *xumsə-čə-ku,*  
what-DAT                      three                      dish                      upset-čA-PROP  
「そこに三枚の皿のひっくり返したのがある、」

(29) は「包帯つきだった」と具体物の名詞として訳することができるが、(30) では、「ひっくり返したもの」というのは具体物でなく、あくまでも「ひっくり返った」状態を示している。したがってこの例はかなり述語的な用法に近づいている。しかしあくまでも *-kO* が必要で、*-čA* のついた語だけでは述語用法で使えない、という点がこの言語における *V-čA* の名詞的な性格の強さを物語っている。(30) と同じように、*-kO* を伴って具体物でなく状態を示している例をもう 1 例あげておく。

- (31) *xai=daa xəm*                      *tətuə*                      *xooni=daa*                      *xəm*  
what=CLT                      all                      cloth                      how=CLT                      all

*bi-i,*                      *aŋgo-čə-ko.*

be-PRS.PTCP                      make-čA-PROP

「何でも全て、服はどんなのでもみんなある、(ちゃんと) 作ってあるのが」

最後に、名詞的用法で対格接辞を伴っている例をあげておく。

- (32) *təi*                      *əʃən=tənii*                      *undiisi, ʃapa-raa*                      *undiisi*                      *təi,*  
that                      host=CLT                      FILLER                      take-CONV                      FILLER                      that
- dalian*                      *xuku-čə-wə*                      *nixəli-xə-ni.*  
bag                      wrap-čA-ACC                      open-PST.PTCP-3SG

「その主人は取って、その袋に包んであるのを開いた」

このように、ナーナイ語の *V-čA* はきわめて名詞的性格が強く、生産性も弱いことがわかる。

## 5. まとめと今後の課題

4 節の各言語における分析結果は次の表のようにまとめることができる。

**表 4    *-čA* に関する言語間での違い**

	出現 頻度	つく動詞の 自他	名詞／動詞的な性格	用法 名詞的/形容詞的/述語的
エウエン語	頻度は 高い 1/1.76p	動詞一般	名詞項を取るなど 動詞的だが、 コピュラを伴うことが 多い点などは名詞的	述語用法も多い 26/0/23
ウデヘ語	頻度は 低い 1/14.1p	結果の残る 他動詞	格や人称がつくのは 名詞的だが、 対格の名詞項をとるなど、 かなり動詞的	述語用法が多い 12/2/26
ナーナイ語	頻度は 低い 1/17.2p	結果の残る 他動詞	全く名詞的	もっぱら名詞用法 31/3/0

このことからツングース諸語の過去形に関する歴史的変遷について、次のような仮説を提案する。

II 群と III 群という、音対応からみて系統的に離れた言語間で機能的な類似が見られることから、本来ツングース諸語における *-čA* は、動作の結果残存する対象や状態を示す被動形動詞の接辞であったと考える。しかし、対格目的語をとるなど、一般的な過去形に発展する素地を十分に備えていた。I 群の言語では、何らかの事情で過去形が失われたか、もしくは証拠性中心のシステムだったものがテンス中心のシステムに移行してきたために過去形が必要となり、*-čA* がその機能を拡張していった。エウエンキー・ネギダル・ソロンの3言語の祖語（以下エウエンキー祖語と呼ぶ）の段階で、*-čA* はもっとも一般的な過去形として定着した。エウエン語東方言では今なお名詞的な性格を強くとどめているが、エウエン語中央・西方言ではエウエンキー祖語とは独立に、同じ方向への変化が起こった、とみる。他方、III 群のナーナイ語をはじめとする諸言語では、その動詞的な性格を失い、生産力が弱く出現頻度も低い名詞形成接辞としてのみ残存しているものとする。

このように、ツングース諸語における *-čA* は、言語によってはきわめて頻度の高い屈折接辞となり、言語によっては生産性の低い派生接辞となった。屈折接辞

となった言語では、そのテンスとしての機能は広いスコープを持ち、文全体に働く。派生接辞となった言語では、その機能は語の内部にしか働かず、文中でより述語的に機能するためには他の接辞の助けを借りなければならない。このように、言語間で対応する形式を通じて接辞の機能の変遷を辿れることは、通言語的にみても興味深いケースではないだろうか。屈折接辞の成立や衰退に関しても、通言語的な研究の進展に寄与するデータを提供するものではないかと考える。

今後は、1.2. 節でみたように II・III 群における *-ka* や *-xa(n)~ki(n)* の来源の解明が残された課題である。IV 群の言語の諸形式やそれらと I・II・III 群の諸形式の対応、さらにはツングース諸語全体のテンス体系の歴史的変遷の解明、ツングース祖語での体系の再建などが今後の最終的な課題である。

## 略号

1, 2, 3...	人称（それぞれ 1 人称、2 人称、3 人称）
ACC (ACCUSATIVE)	対格
AGR (NEGATIVE AGREEMENT)	否定呼応要素
ALIEN (ALIENABLE POSSESSION)	譲渡可能所有（間接所有）
ASP (ASPECT MARKER)	アスペクト標識
CLT (CLITIC)	付属語（クリティック）
CONV (CONVERB)	副動詞
COP (COPULA)	コピュラ
DAT (DATIVE)	与格
DESIG (DESIGNATIVE CASE)	指定格
DIM (DIMINUTIVE)	指小辞
DIR (DIRECTIVE CASE)	方向格
E (EPENTHETIC VOWEL)	挿入母音
FILLER	言いよどみ
INC (INCHOATIVE)	始動相
IND (INDICATIVE MOOD)	直説法
INS (INSTRUMENTAL CASE)	道具格
NOM (NOMINATIVE)	主格
NONFUT (NONFUTURE)	非未来
PERF (PERFECT)	完了
PL (PLURAL)	複数
POSS (POSSESSIVE)	所有（人称接辞）
PROP (PROPRIETIVE)	恒常的所有形容詞化
PRS (PRESENT TENSE)	現在時制
PST (PAST TENSE)	過去時制
PTCP (PARTICIPLE)	形動詞（一種の分詞的な機能を示す動詞形）
REF (REFLEXIVE)	再帰
SG (SINGULAR)	単数



## 転写に用いる記号（IPA と異なるものについてのみ挙げた）

### ・子音

ñ (ɲ), č (tɕ), ʃ (ʃ)      V'（緊喉母音）

### ・母音

Open Mid      o [ɔ]

## 本研究のデータ

本研究のデータのうちの多くの部分は、筆者自身の現地調査によって得られたものである。コンサルタントその他の情報に関しては、参考文献に挙げた元のテキストを参照されたい。

なお本誌の査読者からはきわめて有益なコメントをいただいた。筆者の力不足のため、十分に反映しきれなかった点もあるかもしれないが、推敲する上で大変に参考になった。末筆ながら、ここに記してお礼申し上げたい。

## 参 考 文 献

- 風間伸次郎. 1999. 「アルタイ諸言語のいくつかにみられる所有／存在を示す一形式について」. *Altai Hakpo*. (Journal of the Altaic Society of Korea.) No. 9. the Altaic Society of Korea.
- 風間伸次郎. 2001. 『ナーナイの民話と伝説 6』. ツングース言語文化論集 15. 文部省特定領域研究(A) 環北太平洋の「消滅に瀕した言語」にかんする緊急調査研究 報告書. A2-005. 吹田：大阪学院大学.
- 風間伸次郎. 2002a. 『エウェン語 テキストと文法概説』. ツングース言語文化論集 23. 文部省特定領域研究(A) 環北太平洋の「消滅に瀕した言語」にかんする緊急調査研究 報告書. A2-030. 吹田：大阪学院大学.
- 風間伸次郎. 2002b. 『ナーナイの民話と伝説 7』. ツングース言語文化論集 18. 文部省特定領域研究(A) 環北太平洋の「消滅に瀕した言語」にかんする緊急調査研究 報告書. A2-020. 吹田：大阪学院大学.
- 風間伸次郎. 2002c. 『ネギダール語 テキストと文法概説』. ツングース言語文化論集 19. 文部省特定領域研究(A) 環北太平洋の「消滅に瀕した言語」にかんする緊急調査研究 報告書. A2-021. 吹田：大阪学院大学.
- 風間伸次郎. 2004. 『ウデヘ語テキスト(A)』. ツングース言語文化論集 24/A. 東京:東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所.
- 風間伸次郎. 2005a. 「ナーナイ語の疑問詞による反語表現について」. 津曲敏郎編『環北太平洋の言語』 第12号. 北海道大学文学研究科.
- 風間伸次郎. 2005b. 『ナーナイの民話と伝説 8』. ツングース言語文化論集 27. 千葉：千葉大学.
- 風間伸次郎. 2006. 『ウデヘ語テキスト 2』. ツングース言語文化論集 31. 東京: 東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所.
- 風間伸次郎. 2007. 「ウデヘ語の「複数」を示す要素について」. 津曲敏郎編『環北太平洋の言語』 第14号. 北海道大学文学研究科.
- 風間伸次郎・トヤー 共編訳. 2008. 『ソロンの民話と伝説 2』. ツングース言語文化論集 41. 東京: 東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所.
- 亀井孝・河野六郎・千野栄一編. 1996. 『言語学大辞典 第6巻 術語編』 東京：三省堂
- マテジウス, ビレーム. 1986. 『マテジウスの英語入門 対照言語学の方法』. 千野栄一・山本富啓 訳・解説. 東京：三省堂.

- Avrorin, V. A. 1959. *Grammatika nanajnskogo jazyka, t. I*. Moskva/Leningrad: AN SSSR.
- Bulatova, N. 1999. *Evenki*. Languages of the world/Materials 141. München-Newcastle: Lincom Europa
- Ikegami, J. 1974. Versuch einer Klassifikation der tungusischen Sprachen, *Sprache, Geschichte und Kultur der altaischen Völker*, Akademie-Verlag, Berlin.
- Kazama, S. 2003. *Basic Vocabulary (A) of Tungusic Languages*. Publications on Tungus Languages and Cultures 25. ELPR (Endangered Languages of the Pacific Rim) Publications A2-037, Suita: Osaka Gakuin University.
- Konstantinova, O. A. 1968. Evenkijskij jazyk. *Jazyki narodov SSSR*5, Leningrad, AN SSSR.
- Malchukov, A. 1995. *Even*. Languages of the world/Materials 12. München-Newcastle: Lincom Europa.
- Nikolaeva, I. and M. Tolskaja 2001. *A grammar of Udihe*. Berlin, New York: Mouton de gruyter.
- Novikova, K. A. 1960, 1980. *Očerki dialektov evenskogo jazyka*. (v 2 tomax) AN SSSR, Moskva-Leningrad
- Novikova, K.A. 1968. Evenskij jazyk. *Jazyki narodov SSSR*5, Leningrad, AN SSSR.